〈研究ノート〉

ブラジルからの移住第２世代とバイリンガル絵本プロジェクト
― 浜松市における静岡文化芸術大学の試み ―

池上重弘（静岡文化芸術大学・教授）
上田ナンシー直美（静岡文化芸術大学・准研究員）

＜目　次＞

はじめに
1.　静岡文化芸術大学とブラジル人学生
2.　ブラジル人家庭へのバイリンガル絵本配布
3.　家庭訪問ヒアリングの目的と方法
4.　ヒアリング調査の結果
むすびにかえて

キーワード：浜松市のブラジル人住民、日本の教育システム、移住第２世代、教育達成、バイリンガル絵本

はじめに

2014 年 6 月末現在の法務省統計によれば、在留外国人総数は 208 万人を超え、リーマン・ショックに端を発する深刻な経済危機等の影響で 203 万人台まで落ち込んだ 2012 年末以降、再び微増傾向に転じたことがうかがえる [1]。その一方、ブラジル人については 2008 年末の約 31 万 4 千人をピークに急激な減少が続き、2014 年 6 月末には約 17 万 8 千人（最盛期の 6 割弱）にまで落ち込んだ。しかし、在留資格についてみると、外国人全体では一般永住者 31.9％と特別永住者 17.4％を合計した永住者は 49.3％とほぼ半数に迫り、原則として更新可能で就労について制限のない定住者 7.6％と日本人の配偶者等 7.1％、そして永住者の配偶者等 1.2％をさらに加えると、65.3％に達している。これらは就労に制限のない安定的な在留資格を有する者であり、欧米であればその生活・就労実態から移民とみなされる人々である。ブラジル人については在留者の規模は急減しているが、日本に留まっている人々の中では一般永住資格取得者 62.7％とほぼ 3 分の 2 に達し、家族滞在、滞在の長期化といった定住傾向がこれまで以上に顕著に認められる。

1990 年 6 月の改正入管法施行から 25 年近い年月が経過したにもかかわらず、ブラジル人の子どもたちの教育をめぐっては数多くの課題が依然として指摘される。たとえばブラジル人の集住する基礎自治体によって 2001 年に設立された外国人集住都市会議では、初回以降一貫して教育をめぐる課題が主要テーマに位置づけられている（池上 2013a）。しかしその一方、ひと世代が入れ替わる 25 年ほどの時間の流れのなかで、高校進学を果たし、さらに大学にまで進学するブラジル人の子どもたちもその数はわずかながら確実に増加してきている [2]。

ここ数年、ブラジル人をはじめとするニューカマー外国人の第二世代の若者たちが地域活動の担い手として台頭し、外国人社会と日本社会をつなぐ役割を果たすようになってきている。最近では自治体の多文化共生に関するプランでも、こうした認識のもとに新しいビジョンが立てられるようになってきている。たとえば、「あいち多文化共生推進プラン」（2008 年 3 月策定）を改定し 2013

年３月に策定された愛知県の新プランでは、日本で育ち、日本の大学などで教育を受けた外国人青少年が増えており、今後の多文化共生の担い手として期待できること、企業にとっても外国人は特別な存在ではなくなりつつあること、そして東日本大震災を機に、地域づくりの担い手として外国人の重要性が認識されるようになってきたことが記されている（愛知県 2013）。外務省と国際移住機関（IOM）は 2004 年より毎年、外国人住民と社会統合をテーマとする国際シンポジウム（2010 年からは自治体も共催に加わった国際ワークショップ）を開催しているが、2014 年２月に目黒区で開催された国際ワークショップでは「若手外国人とともに歩む－次世代に向けた挑戦－」というサブテーマのもと、地域における外国人の役割がトピックのひとつに挙げられた（外務省 2014）。

本稿では、「移住第２世代[3]」と呼ぶべきこうした若者たちのうち、浜松市にある公立大学、静岡文化芸術大学に在籍するブラジル人の移住第２世代の学生たちと共に 2013 年度に実施したバイリンガル絵本プロジェクト（以下、絵本プロジェクト）に焦点をあて、その経緯と意義を述べると共に、そのプロジェクトの一環として行った家庭訪問ヒアリングの調査結果を報告することを目的とする。

１　静岡文化芸術大学とブラジル人学生[4]

2000 年度開学の静岡文化芸術大学は浜松市の中心部に位置する静岡県立の大学である[5]。文化政策学部（定員 200 名）とデザイン学部（定員 100 名）の２学部からなり、１学年の定員は両学部合わせて 300 名と小規模である。開学間もない頃から、文化政策学部の国際文化学科には、毎年１名程度、フィリピン籍やベトナム籍の学生が入学していた。しかし、日本で育ったブラジル人学生がコンスタントに入学してくるようになったのはここ数年のことである。ブラジル人の最初の入学者は 2006 年度に国際文化学科（定員 100 名）に入学した学生だった。１年おいて 2008 年度にはデザイン学部に２名のブラジル人学生が入学した。2008 年はブラジル移民 100 周年の年で、本学ではこの３名が中心となり「ブラジル人大学生と高校生との座談会」を開催した[6]。続く２年はブラジル人の入学者はなかったが、2011 年度以降は毎年、国際文化学科に複数のブラジル人学生が入学している。2011 年度は２名、2012 度は４名、2013 年度は４名、そして 2014 年度は３名（この他にコロンビア人学生が１名）である[7]。

静岡文化芸術大学の立地する浜松市は、日本最多のブラジル人が生活し、行政や教育機関、さらに市民団体等による多文化共生の取り組みが盛んな都市として広く知られているが、外国人児童生徒の学習支援に携わる関係者が継続的に集う機会はほとんどなく、団体間の連携や学校と団体との間の連携が課題とされていた。そこで静岡文化芸術大学は、地元の公立大学としての地域貢献活動の一環として、外国人児童生徒の教育環境改善に資する研究を進めるため、主として浜松市内で支援活動を展開する市民団体の関係者、学校教諭、支援員（市教委に雇用される外国人スタッフ等）らが参集できる場として、多文化子ども教育フォーラムを立ち上げた[8]。2012 年６月の第１回には約 100 名の関係者が集まり、2012 年度中は計４回のフォーラムが開催された。2012 年度中のフォーラムでは市や市教委が教育をめぐる取り組みを紹介すると共に、市民団体も支援状況の分析に基づく望ましい支援体制のモデルを提示し、グループ討論を重ねた結果、2013 年２月の第４回フォーラムでは「浜松市・浜松市教委への提言」を採択した。

2013 年６月の第５回フォーラムは「教育支援策をめぐって当事者学生が物申す」と題して、本学に在籍する外国人学生たち（ブラジル人学生８名、中国人学生１名）が日本で義務教育を受けた経験を踏まえ、教育支援策のあり方について提言し、その内容をめぐって参加者と討論する機会となった。とくに自身の家庭を振り返り、親のサポートが決定的に重要なので親に教育の大切さを伝える

機会を設けてほしいとした提言項目は、説得力を持って参加者の胸に響いた[9]。学生たちのこの思いを保護者に伝えるために考え出されたのが、ブラジル人学生たちとブラジル人小学生の保護者たちとをつなぐ絵本プロジェクトである。これは浜松市内の小学校への絵本配布と、希望家庭への家庭訪問によるヒアリングの二段階からなるプロジェクトであった。以下にその詳細を述べてゆこう。

２　ブラジル人家庭へのバイリンガル絵本配布

絵本プロジェクトのツールとなったのは、本学デザイン学部を 2012 年３月に卒業したブラジル人が卒業研究で制作したブラジル人児童向けバイリンガル絵本（学校生活案内冊子『浜松における日本の学校』）である（写真１）。この絵本は、公立学校とブラジル人学校を行き来した自身の体験をベースにしつつ、市内の小学校や教育委員会での丹念な調査に基づいて作られた日本語とポルトガル語の対訳絵本で、ユニバーサル絵本という観点からも高い評価を得ており[10]、実際にこの絵本を手にした浜松市教育長から「ぜひ現場で使ってほしい」とのコメントを得た。

写真1　バイリンガル絵本の表紙

ブラジル人児童の保護者の中には、日本で教育を受けた者も少しずつ増えてきているが、保護者の多くはブラジルで教育を受けており、日本の教育制度や学校生活について十分な知識を持ち合わせていない。たとえば、給食や遠足、家庭訪問について、ブラジル人保護者は自分自身の経験に基づいた具体的なイメージを有していないのである。学校の先生方との間には言葉の壁もあるため、教育委員会や学校では、翻訳資料や通訳付き面談等を通じてきめ細かい情報提供に務めているが、保護者向けの情報ばかりで、児童自身が日本の公立学校に前向きな気持ちを持つような資料はこれまで全く存在しなかった。

バイリンガル絵本『浜松における日本の学校』はこうした欠落を埋め合わせる資料として制作され、レオ、エリザ、マルコスという３名の登場人物が舞台回しとなって、浜松市の小学校での生活、持ち物、習慣等について説明している。23 ページにわたって掲載されている項目は、①学校で使う物と学校の一日、②学校で使う教材や持ち物、③登校、④学校に着いたら、⑤給食、⑥昼休みと掃除、⑦放課後、⑧お休みするとき、⑨学校行事、⑩面談や訪問、⑪最後に、となっている[11]。例えば給食の場面を取り上げると、やわらかいタッチの絵と淡い色使いで給食当番の仕事の様子が描かれ、ポルトガル語と日本語の対訳で短い説明文が加えられている（写真２）。また、白衣やマスクなどのイラストにはひらがなでの表記とその読みのアルファベット、そしてポルトガル語訳が付されている。保護者に学校で必要な持ち物を

写真2　バイリンガル絵本の一部

理解してもらうと同時に、子どもたち自身にとっても日本の小学校で学ぶことが楽しみになるように、との配慮がなされている。

学内の特別研究[12]でこの絵本を1,000部印刷し、浜松市教育委員会の協力のもと、2013年9月に市内の小学校全校に1部ずつ送付すると共に、ブラジル人児童の多い19校ではブラジル人の実家庭に1部ずつ届けた。また、10月には、市教委が開催した入学ガイダンスでも配布され、学校経由の配布と合わせて約420部がブラジル人家庭に届けられた。

３　家庭訪問ヒアリングの目的と方法

（1）目的

2008年末のピーク時以降、ブラジル人の在留数は13万人を超える減少となったが、日本に残ったブラジル人には定住傾向が強く認められ、家族滞在者の中には子どもが日本の高校や大学に進学することを望む家庭も増えてきている。しかし実際に大学にまで進学したブラジル人の若者たちの声を直接聞く機会はほとんどない。また、ブラジル人保護者はブラジルで教育を受けた人が多いため、日本の教育制度、とくに高校進学や大学進学について十分な情報や知識を持ち合わせていない。

絵本プロジェクトでは、単にバイリンガル絵本をブラジル人家庭に配布することを最終的な目的にせず、その絵本を媒介として、本学のブラジル人学生が2人一組になって家庭を訪問し、質問紙を用いたポルトガル語でのヒアリング調査を行い、子どもの教育に関する保護者の支援ニーズを探ることを研究上の目的とした。

しかしこの家庭訪問ヒアリングには、さらに3点、付随的ながら重要な実践上の目的が存在した。第一の目的は、本学のブラジル人学生が家庭を訪問することで、ブラジル人保護者は日本の学校に通ったブラジル人の子どもたちが実際にどのように教育達成できるかを直接理解できるという点である。第二の目的は、児童にとっても、自分の将来を思い描く上でのロールモデルとなる大学生との直接的な出会いが、学びの動機を高めることにつながる点である。そして第三の目的は、ブラジル人学生たちにとっても、自分の持つバックグランドが社会的に活用できることを実感する機会となり、エンパワーメントの契機となる点である。

（2）方法

前述の通り、市内でブラジル人児童が多く在籍している小学校19校では、担任を通してブラジル人家庭に絵本を配布したが、その際ブラジル人保護者向けにヒアリング調査の趣旨を説明した調査協力依頼状を同封して、ブラジル人学生による家庭訪問ヒアリング受け入れの可否について尋ねた。受け入れの意向を持った保護者は自分の連絡先を返信用紙に記入して学校に届けた。学校側はそれらの返信用紙をとりまとめて大学に送付した。また、2013年10月には翌年度に小学校に上がる子どもたちを対象とした入学ガイダンスで、出席した保護者16名にバイリンガル絵本と調査協力依頼状を配布し、その場で5名から協力を得た。その結果、全部で43世帯のブラジル人家庭から協力できるとの意向を確認することができた。

しかし､実際に電話でアポイントメントを取る際に｢仕事が忙しい｣という理由で調査協力を断わった家庭やなかなか電話がつながらない家庭もあった。また、2013年11月中旬から12月中旬の1ヶ月間という限られた期間で日程調整を図った結果、訪問する学生と訪問先のスケジュール調整が困難だった場合もあり、実際に学生たちが訪問できたのは協力者の約半数の22世帯だった。その中には両親が揃って質問に回答してくれた場合もあるため、回答者数は33名となっている。

家庭訪問では保護者に対して、家族形態、ブラジルでの生活、来日歴と日本での生活、仕事の状況、子どもとの関わり方、バイリンガル絵本の評価、子どもの進路についての考え等について質問した。とくに子どもの進路に関しては、子どもの進学への期待、進学をめぐる課題、日本の学校に関する不明点について質問した。また、保護者側からのブラジル人学生に対する質問には可能な限り回答した。

ヒアリング調査実施に際しては、訪問の約束の取れたブラジル人保護者宅を本学のブラジル人学生が2人一組となって訪問し、ポルトガル語でヒアリングを行った。1名は主としてポルトガル語で書かれた質問紙を保護者に提示しながら質問を発し、もう1名は回答を記録するように役割を分担した。ヒアリング結果及び訪問時の観察結果については、日本語での報告書提出を求めた。

４　ヒアリング調査の結果

今回の調査の回答者は、少なくとも日本の大学に通うブラジル人学生の訪問調査に関心を示した人たちであり、平均的なブラジル人家庭より教育に対して高い関心を抱いている層に偏っている可能性がある。しかし逆にみれば、この調査は子どもの進学、とくに大学進学に強い期待を寄せている保護者はどのような属性の人々であるかを明らかにしているとも言える。また、そうした保護者が何を課題と感じ、どのような支援を求めているかも浮き彫りにしている。以下では33名の回答者のデータを紹介する。ヒアリング時にはそれぞれの設問に対して、特定の選択肢は提示せずに自由に回答してもらった。ヒアリング後に調査者側で一元的に回答内容のコード化を図り、いくつかの選択肢に落とし込んでいった。とくに言及しない限り、選択肢の比率は回答総数33名を100%として四捨五入した数字である。

（1）基本属性

回答者の性別は女性が64%、男性が36%で、女性がほぼ3分の2を占める。子どもの教育に関する調査だったため、母親が主に回答した結果を反映している。

最終学歴はいずれもブラジルでのもので、高校卒業が37%でもっとも多く、大学中退15%、高校中退15%、中学中退12%、中学卒業9%、大学卒業6%と続く。大学を卒業ないし中退した人（つまり大学に進学したことがある人）は21%で全体の5名に1名に留まっている。

（2）来日前の状況

ブラジルでの出身地はサンパウロ州が61%、パラナ州が12%、リオデジャネイロ州が9%で、あとはアマゾン州、バイーア州、パラ州、ミナスジェライス州、ペルー国、ボリビア国がそれぞれ3%ずつだった。

ブラジルでの仕事は事務系が48%、職歴なしが21%で目立っていた。営業職、車関係、手芸などがそれぞれ6%、工場、デザイン系、看護師、保育士、家政婦がそれぞれ3%だった。日本で就業しているような工場での労働に従事していた者はほとんどいないことがわかる。

来日前の日本語学習経験について尋ねたところ、経験なしが70%、経験ありが30%だった。また来日前の日本語能力については、まったくゼロが70%でもっとも多く、家庭内の日常会話のみ、簡単なあいさつのみがそれぞれ9%、日常会話とひらがなの読み書き程度という回答が12%だった。必ずしも日本語能力が高かったわけではないことがうかがえる。日系人社会との関係については、「まったくつきあいがなかった」が52%で過半を占め、「たまにつきあっていた」が27%、「あまり

つきあいがなかった」が 12%、「よくつきあったいた」が 9%となっている。今回の回答者には、教育熱心な日系人社会とは距離のある人が多かった。

（３）日本での通算滞在年数と就業状況

日本での通算滞在年数は 20 年以上が 21%、16 年間から 19 年間が 40%、12 年間から 15 年間が 33%となっており、12 年以上の滞在者が 94%を占める。日本で家族と共に長い期間にわたって生活してきたことがわかる。しかし、初来日年は 1991 年と 1996 年がそれぞれ 15%、1998 年が 13%で 3 つの山があった。また、帰国経験については、「ずっと日本にいる」が 15%でけっして多数派ではない。帰国経験を持つ者は一度が 27%、二度が 31%、三度が 12%、四度以上が 12%で、一度ないし二度の帰国経験を持つ者がほぼ 6 割に達している。帰国時期までは確認しなかったので、子どもの学齢期にかかる国境移動かどうかは不明だが、子どもの教育に何らかの影響があった可能性が高い。

日本でしてきた仕事（必ずしも来日時の初職とは限定していない）としては、工場労働が 97%で圧倒多数を占めるが、今回の回答者の中には学校の支援員や行政機関の仕事と回答した者がそれぞれ 6%あった。また、内職、アルバイトとの回答もそれぞれ 6%だった。飲食店、清掃業務、送迎業務、現場作業、派遣会社がそれぞれ 3%ずつあった。

現在の職業も工場労働が圧倒的に多く 73%だが、学校勤務、市役所勤務、総領事館勤務などホワイトカラーの職種で働く者がそれぞれ 3%ずつ含まれている点に注目したい。仕事の時間帯では、昼間の勤務が 64%でもっとも多く、二交代制が 15%、夜勤、パート、決まっていないとの回答はそれぞれ 6%だった。

（４）日本人との接点

仕事以外の日本人の知り合いの有無について尋ねたところ、ありが 55%で、なしが 45%だった。滞在期間が長期化しているにもかかわらず、仕事以外の場面で日本人から情報を得るような機会は必ずしも多くないことがうかがえる。

日本の社会に関する情報源としては、自治会の回覧板が 64%、ブラジル人の知人が 59%、市の広報が 46%、フェイスブックが 38%、日本のテレビが 32%となっており、以下は子どもの学校、日本人の知人、インターネットが 27%で続く。自治会の回覧板から日々の生活に関する情報を得ている人が少なくないことがわかる。その一方、ブラジル人の知人やフェイスブックなどのように主としてポルトガル語で交わされる情報に頼ることも多い。教育に関する情報などは正確さを欠く形で流通している可能性も否定できないだろう。

（５）子どもとの関係（回答総数 22）

家族構成については、22 世帯中で「父、母、子ども 2 名」が 37%、「父、母、子ども 3 名」が 23%、「父、母、子ども 1 名」が 14%、「父、母、子ども 4 名」が 5%となっており、両親と子どもという構成の家族が 79%を占める。一方、母ないし父の一人親と子どもという構成の家族が合計で 17%あり、さらに肉親ではない保護者と子どもという家族が 4%あった。

次に子どもの日本語力とポルトガル語力について尋ねた。日本語力は「問題ない」が 74%と多く、「会話は問題ない」が 18%、「読み書きに問題ある」と「少しだけ理解できる」がそれぞれ 4%だった。あくまでも保護者の主観的評価だが、日本語力に問題ないと思われる子どもが全体の 4 分の 3 を占めていた。一方、ポルトガル語力については「問題ない」が 14%、「日本語の方が得意」が 32%、「読み書きに問題がある」と「少しだけ理解できる」がそれぞれ 27%だった。つまり、今回のヒアリング対象の世帯においては子どもの日本語力よりポルトガル語力の方に保護者は大きな問題を感じていることがうかがえる。しかしながら、子どもと話す言語については、ポルトガル語のみが 69%で多数を占め、日本語のみは 19%、主にポルトガル語と両言語が 4%だった。ペルー人家庭ではスペイン語で話すとの回答であった。ここから、子どもと保護者の間で言語の習熟度に差があり、親子間のコミュニケーションが十分に機能していないか、今後機能しにくい状況が生じる可能性が指摘される。

子どもと接する時間については、「平日の夜と週末」が 59%で多く、「平日の朝と夜と週末」が 23%、「主に週末」が 14%となっていた。平日も時間を作って子どもと接するよう心がけている様子がうかがえる。

また、学校行事への参加についても「全て欠かさずに行く」との回答が 55%、「ほとんど行く」が 37%、「配偶者と交替で行く」が 4%で、ほとんど全ての家庭が学校行事への参加を重視していることがわかった。ブラジル人大学生の家庭訪問を受け入れた家庭は、学校に対して積極的な関わりを持とうとしている様子が伝わってくる。

さらに直接的な子どもとの関わりについて尋ねてみた。絵本の読み聞かせをするか（したか）どうかについては、はいが 68%、いいえが 32%となっている。子どもの宿題を見てあげるかどうかについては、「可能な範囲で見てあげる」が 32%でもっとも多く、「全部見てあげる」と「算数や理科は教えられない」がそれぞれ 18%で、これらを合わせると、68%が何らかの形で宿題を見てあげていることがわかる。

（６）バイリンガル絵本に対する評価（回答総数 22、複数回答）

今回の家庭訪問ヒアリング実現の媒介となったバイリンガル絵本については良い点として、「内容が良い」が 73%、「入学時に役立つ」が 46%、「デザインがかわいい」が 23%だった。一方、改善すべき点としては、「親への情報が不足」が 38%、「教科書の説明」が 18%だった。バイリンガル絵本は初めて小学校に入る子どもとその保護者を主たる対象としているため、「学年ごとの違いを説明してほしい」、「文化の違いを説明してほしい」といった声もあった。

（７）子どもの進学への期待と課題（回答総数 22、複数回答）

子どもの進学への期待としてもっとも多かったのは「国を問わず大学に進学」で 46%を占めた。「日本の大学に進学」は 28%だが、「ブラジルの大学に進学」は 4%となっており、ブラジルの大学に限定して進学を期待している保護者は少ないことがわかる。また、「子どもがやりたいこと」という回答が 14%あり、必ずしも大学進学だけを最重要視しているとは限らないことがうかがえる。

進学に関わる課題としては、「経済面」が 55%で抜きんでて多く、「子どもの学力」が 23%とそれに続く。さらに「情報がない」、「親が日本語がわからない」、「日本の教育制度がわからない」がそれぞれ 18%となっていた。これら 3 点はいずれも教育情報の不足を意味している。また、「帰国時期が未定」との回答も 14%あった。自分が将来生きてゆく国が日本なのか母国なのか定まらず心が揺れる子どもの姿が浮かぶ。

日本の学校に関する不明点については、学校生活・ルールと PTA 活動がそれぞれ 27%で多かった。次いでいじめの問題が 18%だった。

（８）主なポイント

今回のヒアリング調査結果から見えてきたこととして、進学に関する主なポイントをまとめたい。

自分自身が大学進学を果たした保護者は約２割だが、子どもの大学進学を希望している保護者は約８割となっている。つまり、子どもには親のように工場で働いてほしくないという強い願いが認められた。また、保護者の立場から見た進学に関する課題として次の諸点が挙げられた。

・宿題（特に算数、理科、国語）をあまり見てあげられないため、子どもの学力が心配。
・学校行事に参加しているが、PTA 活動や親としてやるべきことがわからない。
・経済面が心配。通学支援や奨学金制度のことを学生たちからはじめて聞いた。
・日本語がわからないため、進学に必要な情報が不足している。
・ポルトガル語に翻訳された進学に関する情報も届いていない。

むすびにかえて

2014 年１月に浜松市で開催された第６回多文化子ども教育フォーラム「ポルトガル語での討論Ⅳ～日本の大学に進学したブラジル人たちの経験から学ぼう～」は、家庭訪問ヒアリング調査の結果をポルトガル語で報告し、ブラジル人が大半を占める 50 名ほどの参加者とポルトガル語で討論する機会となった。家庭訪問で子どもの教育に関する悩みを聞き取ってきたブラジル人学生たちは、調査結果を紹介する中で、とくにいじめに関する問題と進学に関わる費用の問題を強調した（写真３）。両者ともヒアリング項目には設定されていなかったが、ヒアリングが進むうちに、ブラジル人大学生を前に保護者の側から話を切り出してくることが多かったという。なかでも、同じブラジル人からいじめを受けているという相談も少なからずあり、ブラジル人学生たちは「自分たちが小学生の頃はブラジル人どうしのいじめはなかった」と述べ、同胞で支え合うという意識の希薄化に対する強い危機意識を表明していた。また、学費確保の方法として奨学金の制度について詳細な質問を受ける場合が多く、保護者の関心のひとつが進学をめぐる経済面の課題であることを痛感したと強調していた。

写真3　ポルトガル語での討論会の様子

ブラジル人卒業生が制作したバイリンガル絵本は、弟・妹たちの世代に向けられたメッセージである。それを手に現役のブラジル人学生たちがブラジル人児童の家庭を訪問するこのプロジェクトは、学生による単なるヒアリング調査という枠組みを越え、ロールモデルのデリバリーとも表現できよう。ブラジル人集住都市・浜松の公立大学で学ぶ移住第２世代のブラジル人学生たちが、同じまちの小学校に通うブラジル人児童宅を家庭訪問する研究プロジェクトは全国でも類例のない取り組みであり、保護者の相談に乗り情報提供をするという以上に、ロールモデルと直接出会うことで子どもたちの学習意欲をかき立てるという意味でモチベーション支援としての大きな意義を持ったと言える。

註

1 法務省『在留外国人統計（旧登録外国人統計）統計表』各年版。以下、この段落の統計数値は同資料に拠る。

http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html（2014年11月27日閲覧）

2 日本におけるブラジル人の教育達成水準の低さは他国籍の外国人と比較しても顕著であり、2000年の国勢調査では留学生ではないブラジル人大学生の存在はほぼ皆無だった（鍛冶 2011）。大学では必ずしも在留外国人の学生の在籍状況を組織的・体系的に把握していないが、静岡県西部地域の大学に対する調査結果からは在留外国人学生が微増している様子がうかがえる（池上 2013b）。

3 移住第2世代とは、親に連れられて外国から来たり、この国で生まれた外国にルーツを持つ若者たちを指す。「移民第2世代」という表現が一般的だが、日本の場合、国家の政策として移民を正式に受け入れる態勢になっていないこと、また定住化が進む外国人当事者も当初はその多くが短期的な滞在を目的として来日したことを踏まえ、制度的・主観的な意味で移民と呼ぶには抵抗があるため、移住第2世代という用語を使っている。

4 ここでブラジル人学生としているのは、国籍がブラジルであるか日本であるか（あるいは二重国籍か）にかかわらず、ブラジルにルーツを持つ学生を指す。

5 2000年4月の開学当初は公設民営の私立大学として学校法人が運営していたが、2010年4月に静岡県設立の公立大学法人に移行した。

6 本学に在籍する3名のブラジル人大学生と浜松市内の公立高校に通う8名のブラジル人高校生が日本語でこの国での生活や将来について語り合った座談会の記録は以下のURLからタイトルをクリックして閲覧できる。　http://wwwt.suac.ac.jp/~ikegami/report01.html（2014年11月27日閲覧）なお、この座談会は『日本の中のブラジル、ブラジルの中の日本－写真で見る100年、過去から未来へ－』と題して本学で開催された写真展の関連企画のひとつとして位置づけられ、座談会の様子をまとめたDVDが展示のひとつとして注目を集めた（鏡田・池上 2009）。

7 これらの学生たちは留学生ではなく、いずれも日本の高校を卒業した定住外国人学生であり、外国人特別枠ではなく日本人受験生と全く同じ入試に合格して入学している。なお、同様の定住外国人として中国人学生が2013年に1名、2014年度に2名入学している。

8 多文化子ども教育フォーラムのサイトから、当日配布資料や関連する報道記事等を閲覧できる。http://wwwt.suac.ac.jp/~ikegami/fice00.html（2014年11月27日閲覧）

9 外国人学生たちがまとめた提言は以下のURLから該当部分をクリックして閲覧できる。http://wwwt.suac.ac.jp/~ikegami/fice05.html

10 絵本学会第16回大会のシンポジウム「共に生きる　絵本にできること」のパネリストとして、「日系ブラジル人移住第２世代が托す"バトン"としてのUD絵本」のタイトルで報告したところ、会場から大きな反響があった（池上 2013c）。なお、絵本の著者による制作の意図については金城（2013）を参照。

11 実際の絵本での日本語の表記はすべてひらがなあるいはカタカナであり、漢字は使用されていない。

12 2013年度 静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター長特別研究「多文化環境に生きる子どもの教育達成支援策をめぐる研究」（研究代表：池上重弘）。

引用文献リスト

愛知県 2013 『あいち多文化共生推進プラン2013－2017－ともに生き、ともに輝き、ともに創る－』名古屋：愛知県地域振興部国際課多文化共生推進室。

池上重弘 2013a「外国人集住都市会議」吉原和男編集代表『人の移動事典－日本からアジアへ・アジアから日本へ』東京：丸善出版、184－185。
池上重弘 2013b 「定住外国人学生の修学実態調査報告－静岡県西部地域の大学を中心に－」『静岡文化芸術大学研究紀要』14: 97－100。
池上重弘 2013c 「日系ブラジル人移住第2世代が托す"バトン"としてのUD絵本」絵本学会第16回大会シンポジウム「共に生きる　絵本にできること」（発表記録）
http://www.u-gakugei.ac.jp/~ehon/cn10/016/pg900.html（2014年11月27日閲覧）
外務省 2014 『平成25年度「外国人の受入れと社会統合のための国際ワークショップ」若手外国人とともに歩む～次世代に向けた挑戦～』東京：外務省領事局外国人課。
鏡田彩乃・池上重弘編 2009 『ブラジル人大学生と高校生との座談会－移民パネル写真展の関連イベントとして－』(2008年度静岡文化芸術大学学長特別研究「日本の中のブラジル、ブラジルの中の日本－写真で見る100年、過去から未来へ－」研究成果報告書）浜松：静岡文化芸術大学
http://wwwt.suac.ac.jp/~ikegami/report01.html（2014年11月27日閲覧）
鍛冶致 2011 「外国人の子どもたちの進学問題－貧困の連鎖を断ち切るために－」移住連貧困プロジェクト編『日本で暮らす移住者の貧困』東京：移住労働者と連帯する全国ネットワーク、38－46。
金城ジゼレ 2013 「自らの経験を通して製作した導入教育絵本"ESCOLA do JAPAO em Hamamatsu"の可能性」移民政策学会2013年度冬季大会シンポジウム『日系ブラジル人移住第２世代の未来を考える』（報告レジュメ）
http://iminseisaku.org/top/conference/131214_kanashiro.pdf（2014年11月27日閲覧）

引用WEB情報（以下はすべて2014年11月27日閲覧）
多文化子ども教育フォーラム
http://wwwt.suac.ac.jp/~ikegami/fice00.html
第５回多文化子ども教育フォーラム~当事者学生が物申す~
http://wwwt.suac.ac.jp/~ikegami/pdf/fice/130621_fice05_students.pdf
法務省『在留外国人統計（旧登録外国人統計）統計表』各年版。
http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html

Second-generation migrants of Brazilian origin and the bilingual illustrated book project : Report on an approach by the Shizuoka University of Art and Culture in Hamamatsu

Shigehiro Ikegami
Nancy Naomi Ueda
(Shizuoka University of Art and Culture)

More than ten Brazilian students who grew up in Japan are currently enrolled at the Shizuoka University of Art and Culture (SUAC) in Hamamatsu city. In 2013, SUAC conducted a project in which bilingual illustrated books written by a former Brazilian student were distributed to elementary schools in the city. This served as a means for current Brazilian students to visit the homes of Brazilian families and find out their educational needs. Feedback was given to the local community through the Forum on Intercultural Children's Education (FICE). This paper reports the details of the project and the results of the home visit survey.

Keywords：Brazilian residents in Hamamatsu, Japanese educational system, second-generation migrants, educational attainment, bilingual illustrated book